

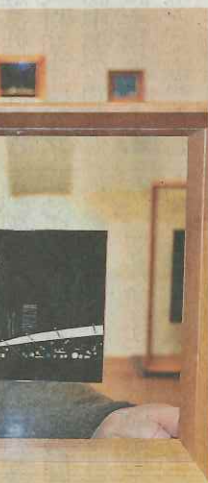
ツピングの柄を、同大空間作法領域の学生8人それぞれデザインを考え

賞に輝いた玉田さんの作品は、JAFのイメージカラーである紺色を基調に、シートの座席やハンドルに加え、電子部品から延びる線をイメージした黄色いテープに施した。玉田さんは「レーザーを載せることが動くような雰囲気を出した。見た人に『何かぞ』と話題にしてもら」と話した。

(森本尚平)

景を多彩に

さん 中区で個展



螺鈿を用い、漆に都市の夜景を表した壁面飾りの作品を示す三好さん(中区千代田3の工芸ギャラリー手児塚で)

シ、東京の高層ビル群やコンピナートの夜景を繊細にかたどる。見る角度によって螺鈿は青にもピンクにも輝く。貝片の裏に金、銀の箔を貼ったり、時絵を施したりと多彩な技法を操っている。

モミジの色の移ろいを表現したランプスタンドなどが並ぶ会場＝熱田区波寄町の名古屋アイクリニックで



白内障手術で視力回復

見える喜び 光で表現

白内障の手術により視力を回復したステンドグラス作家、牧野克己さん(60)＝稲沢市東緑町一＝による作品展が、牧野さんの手術を行った名古屋アイクリニック(熱田区波寄町)で開かれている。牧野さんは「改めて目の大切さを感じられる色彩と造形を楽しんでほしい」と鑑賞を呼びかけている。

パネル作品とランプスタンドの計二十三点を展示。パネルは空想の風景を描いた水墨画と赤や黄色のガラスを組み合わせた作品などで、発光ダイオード(LED)内蔵で照明としても使える。無数のモミジの葉を集めたランプスタンドでは、色を重ねることで四季の移ろいを表現した。

牧野さん ステンドグラス作品展 熱田

大手電機メーカー社員だった牧野さんは、欧州出張中に見た大聖堂のステンドグラスに感動し、五十九歳で早期退職して創作を始めた。十年ほど前に白内障を発症し、制作にも支障を来していたが、二〇一二年に左目、一七年に右目の手術を終え、視力が回復した。

クリニックでは、待合スペースにピアノを置き、作品展や演奏会など芸術活動の発表の場として貸し出している。牧野さんは「治療後の励みになる。作家同士のつながりも生まれれば」と期待する。展示は十七日まで。主に来院患者向けだが、十一日午前十時～午後四時半は一般向けに開く。(芝野享平)

加害者にならない 犯罪被害者遺族講



中村区の笈

中村区の笈瀬中学校で、人権講演会が開かれ、暴行事件で当時十五歳少年を亡くした堺市の一人子さんが登壇した。犯罪被害者遺族の立場から命

学生設立企業が今 SDGs 就活フェア

同朋大、約50人

県内外の大学生が企画する「SDGs就活フェア」が三日、中村区の同朋大開かれた。SDGs(持続可能な開発目標)を活

取り入れる企業七社の者が集まり、学生たち見交換や事業説明をしよう。福祉関係や食品販売、自動車リサイクルなどの七社がブースを設置。